

栗原澄子

目的 安土桃山時代から江戸時代の武家の染織類には、どのような種類のものがあつたか、それは、どのような形態・縫製方法であつたかをしらべる。

方法 久能山東照宮博物館に收藏されている『宝物目録』名では「白御神衣・御宿直物(御捲巻・御敷御座・御枕)」とされている遺品9点を対象とした実態調査である。

結果 遺品9点のうちの白御神衣3具の1つは家康公へ、他の2具は久能山東照宮に合祀されている日枝神社と箱荷神社へ。御宿直物はいずれも家康公へ。これらのすべては家康公逝去後、御祭神御料として幕府からとくに調献したものとされている。

御神衣3具は、いずれも表裂が白宝尽文様地で、上文は1具は丸に葵紋、他は、丸に巴紋・丸に箱穂紋で、裏裂は白平絹綿入れのニッ重ねの桂である。宿直物の御捲巻2具は、どちらも表裂は赤地に萌葱唐草文様、上文は金茶と黄・浅葱・緑・紺・薄紅の牡丹文様錦で、裏裂は紅精好の絲真綿入れである。御敷御座2張のうち、1張は白地=重禱で、回りは赤地錦、他は紫地=重禱で、回りは黄地錦。枕2具はいずれも赤地錦である。

ニッ重ねの御神衣3具は、すべて文様は肩山を基実として、前後とも上向きに織られ、特に地文の宝尽文様は袖・後身頃・前身頃・衽・襟が、後・前とも中央に向つて文様の織られてあるなど、他に例をみないほど織り方にも配慮された佳品である。御捲巻は2具とも、右前身と右衽・右襟の文が10cmほど長く依られており、厚手の綿はすべて真綿が使用されていた。